

モモを加害する夜蛾類の発生と被害について

誌名	茨城県病害虫研究会報
ISSN	03862739
著者名	稲生,稔
発行元	茨城県病害虫研究会
巻/号	2-3号
掲載ページ	p. 43-44
発行年月	1964年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



モモを加害する夜蛾類の発生と被害について

稲 生 稔

最近県内の畑作地帯で桃の特産地形成を目標に生食用および缶詰用桃の栽培が普及しつつある。これらの栽培の増加とともに病害虫の発生も急激に増加しその被害も多く、特に収穫時の吸蛾類による加害は著しく園内防除が急務となつてきた。この害虫防除対策の一端として園内発生長消および被害程度を把握し防除資料に供せんとして調査を行なつた。その結果を報告する。

I 材料および方法

場所 那珂町菅谷 宮本哲三氏桃園

品種 缶詰用桃 缶桃5号 同14号
樹令 5年

栽培密度 2m × 3m 面積 5ha

地理的環境 園の南西は人家の雑木林で北傾は農道、杉松林。東は畑地で園は南西に傾斜し東西に長い。

調査方法 蛾の発生長消調査。8月上旬より4回、夕暮（7時）より1時間2人で園内を巡視、蛾の飛来または加害しているものをほ殺採集した。調査器具は6V懐中電灯、ほ虫網、毒ピン各2ヶ。

被害調査は缶桃14号のみ8月23日に一次加害および二次加害について調査を行なつた。また被害の見わけが困難な果実は摘果し2日ほど放置後調査を行なつた。

II 結果および考察

(1) 蛾のほ殺状況

第1表に示すとおり採集夜蛾のほとんどはほ殺によるが少数は目撃したのもも掲載した。吸蛾の種類はアケビコノハ、アカエグリバの2種で他種のほ殺は認められなかつた。

第1表 夜蛾類の園内ほ殺状況

種類 月日	アケビ コノハ	アカエ グリバ	調査時の天候
8月 7日	1匹	6匹	曇
11	9	13	晴
16	5	24	晴
23	1	9	曇(湿度高い)
計	16	52	

夜蛾の園内飛来は日ほつ直後が多くその後漸次減少するようである。時期別にはアケビコノハは8月11日のほ殺が多く、アカエグリバはそれよりやや遅れ8月16日であつた。その後両蛾とも漸次減少した。また果実が収穫時に近づくにつれて蛾の飛来が多く、桃園の中央部より周囲の飛来、ほ殺が多かつた。なお熟度の進んだ果実ほど飛来が多く、樹の上梢が多い傾向を示した。品種間では缶桃5号が14号より熟期が早いためか飛来も早目であつた。

(2) 被害状況

第2表 収果時における被害調査

区	項目	調査 果数	無被害 果数	被害 果数	被害率
	袋が完全なもの	50ヶ	38ヶ	12ヶ	24%
	袋が無いか、やぶれていたもの	50	19	31 (7)	62

注 ()内は二次加害のもの

第2表に示すとおり缶桃14号のみの調査であるが袋が完全であつても紙を通して吸収したあとがみられ24%の被害率を示した。また果肌の露出しているものは62%と極めて高い被害率を認めた。また二次的に加害を受けたものは被害甚だしく落果が目立つた。

以上の調査は園樹が同一品種でないため熟期が斉一でなくほ殺に困難をきたしたため本

年のみの調査で考察するのは極めて危険と思われるが

- i 夜蛾の園内飛来は桃の熟期と深い関係があり、熟度の進んだ果実に集中して飛来する様である。また缶桃種にはアケビコノハが8月上旬、アカエグリバが8月中旬に飛来最盛を見るように思われる。袋生量はアカエグリバが多い。
- ii 被害については紙袋覆でも2割の加害が認められ、無袋では甚大な被害を受ける事を認めたので無袋栽培の普及には夜蛾の防除が必要の様に思われる。

(茨城農試 病虫害部)